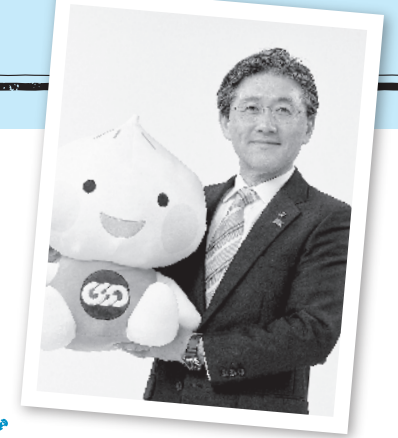




相原事務局長の

ナチュラル

Natural Note

のーと

vol.
9

私たちの現在地

連合結成 30 周年を迎え幕開けた今期も残すところ僅かになりました。雇用対策に全力を尽くした 2 年間で、運動の改革の芽をいぶかせた期ともなりました。そして、来期 17 期も目前に迫りました。改革をさらに進め、実らせる重要期。私たちの現在地を確認し、連合運動の前進へ歩みを進めましょう。

祈り

今年の平和行動も、昨年に続き、参集形式を一部見直しての開催となりました。コロナ禍の中、青年委員会ははじめ、地元の方々が工夫を凝らし作成した映像から平和の尊さを学び、WEB 参加を通じて、各地から平和への祈りを捧げました。戦争の実相を語る声は年々、細くなっています。だからこそ、私たちの声を、尊い未来に向かって届かせていかなければなりません。終戦から 76 年。年月を重ねることに私たちの声は、行動は、その重みを増していきます。過ぎ去りし日々を忘れることはあつてはなりません。

葛藤

この月刊連合 8・9 月合併号が皆さんのお手元に届くのは 8 月末頃から。東京オリンピックは既に閉幕。感染爆発の様相を呈する状況下、予定通りパラリンピックは中盤戦を迎えているでしょうか。1 年の延期を経ての本大会。闘い終えた日本選手からは、大会開催への感謝とともに、メンタルマネジメントの苦労が滲

対話

感染拡大の防止には国際的な連携・協力が不可欠な一方、コロナ禍が、主要国に経済安全保障の現実を突きつけ、皮肉なことに国同士の壁を高くする格好とも

みです。復活の一步を印象づけた女性スイマーにも、惜しくも半世紀ぶりのメダルには届かなかったサッカー男子イレブンにも大会開催への賛否は、耳に届いていました。自らの泳ぎや相手チームの攻略法以前に様々な葛藤に直面したアスリートのひとつの横顔です。

一方、コロナ新規感染者数と日本選手団のメダル獲得数に日々、触れる私たち。気を引くニュース速報のチャイムを複雑な思いで画面を覗き込む自分がいました。そして、誰も冒すことはできないオリンピック、パラリンピックの汗のはずなのに、誹謗中傷がなお、選手を追い込みます。しかし、圧倒的に多くの国民はこうした状況に心を痛め、確かな眼差しで一つひとつの競技を見つめています。勝者を称える選手の涙も、転倒してもチャレンジを忘れなかったライバルへ駆け寄る姿も、命の躍動、その尊さを再確認するには充分すぎるのですから。

なりました。マスク、防護服、重要医薬品やその原材料に至るまで、その多くを中国に依存している現実です。我が国においては、半導体等、重要戦略物資の再定義と対応が不可欠な局面にもあります。

また、権威主義的な国家の台頭、拡張は、民主主義の価値体系にも揺らぎを与えています。グローバルに展開するビジネスには、これまで以上に人権問題への対応が求められています。サブライチエーションも含めた、人権デューデリジェンスへの取り組みに期待が集まる背景です。政労使をはじめ、社会を構成するあらゆるセクターによる「社会対話」の充実が待ったなしであり、国内外で連合が役割を果たさねばなりません。それは、カーボンニュートラルをはじめとする社会課題への基礎であり、「公正な移行」に向けた架け橋となる重要な取り組みです。

挑戦

労働運動は新たな挑戦の入り口にあります。長年、私たちの取り組みは、職場の「中心的」な声を集め、産業の「代表的」な課題解決に力を注ぎ、家族や働き方の「標準的」なモデルを描き社会の健全性を問うてきました。問題、課題は

提起

この間人々は、行動変容を強く求められてきました。多くの人々は、忠実に日々の暮らしを見直してきました。その一方で、長期化するコロナ禍に直面し、

私たちが働き、暮らすこの社会ははたして、行動変容に値する社会足り得るのか、という諦めにも似た気分の拡がりを懸念します。

一方、連合の仲間、日々、働く現場から社会の有り様を見届けています。それは、児童や生徒の姿から受け止める家庭や地域の変化、市民サービスの最前線を担う立場から見える公共への意識、お客様との接遇を通じて垣間見るモラルの状況など多様です。働く現場に基づく課題提起こそ日本社会を立て直す答えでありと、より多くの方々に耳を傾けて頂けるためにも、私たちの訴え、その発信の意義を高めていかなるべきではありません。

『MOMO』のモモは、相手の話を注意深く聞いているだけなのですが、その相手は話を聞いてもらっているうちに良い考えがすうっと浮かんだり、悩みのある人には、希望と明るさが湧いてきました。モモに話を聞いてもらおうと良いと多くの仲間が訪ねてきます。労働組合に話を聞いてもらおうと、期待が集まる来期 17 期にしていきたいものです。「私たちが未来を変える」と前進を続ける意味がそこにあります。

「2021 年 8 月 23 日記」